

韓国知識人と金芝河

井出愚樹 著



青木書店

韓国知識人と金芝河

井出愚樹著



い て る じゅ
井出 愚樹

1937年 高知県に生まれる

現代朝鮮文学・朝鮮問題研究家

訳書『わが魂を解き放せ』(大月書店, 1975年)

『良心宣言』(大月書店, 1975年)

『金芝河作品集 1, 2』(青木書店, 1976年)

『獄中から』(大月書店, 1977年)

韓国の知識人と金芝河

1977年 3月20日 第1版第1刷印刷

1977年 4月1日 第1版第1刷発行

* 定価はカバー・売上カードに表示

著 者 井 出 愚 樹

発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60

振替口座・東京 8-36582

電話・東京 (292) 0481 (代表)

郵便番号 101

(分)0030(製)0079(出)0015

第一印刷・黒岩大光堂

© 1977, Aoki-Shoten, Tokyo

目 次

序論 獄死した三人の朝鮮人文学者と今日のわれわれ	3
--------------------------	---

第一部 独裁と南北分断に抗して

I 長詩「米第八軍の車」と詩人鄭孔采	30
II 雑誌『青脈』の訴えたもの	51
III 長期独裁へと始動しはじめる六〇年代末	70
IV 世直しの立ち上がり	92
V 維新独裁体制の構築	110
——破局への序幕——	

第二部 たたかう韓国民衆の子——金芝河

I 金芝河の抵抗と「民青学連事件」	138
II 死の法廷と牢獄をつつむ救援の動き	156
III 金芝河の「良心宣言」と韓国のカトリック	172

IV	金芝河の軌跡……………	196
	——「黄土の道」から「政治的想像力」へ——	
V	韓国における金芝河文学の位相……………	227
後記	……………	253

韓国 の知識人 と金芝河

序論 獄死した三人の朝鮮人文学者と今日のわれわれ

一 獄死した三人の文学者

一九一〇年八月二三日、日本は武力を背景に朝鮮を併合し植民地として領有したが、この直後の『東京朝日新聞』は、論説「併合せらるゝ韓国」のなかでこういつている。

「韓国の如きは元来独立国として存在し得べき硬度を有する物体に非ず。其二千年もの歴史も多くは他の国家に依附随従したる事跡にして日清兩國を硬く丸き物体に譬れば其接触せざる隙間に在りて僅かに不完全なる国体を維持せしのみ。近來西洋列島の圧力頻に東洋に加はるに及び日清露米英の隙間を転々せしが遂に国としての存在を保つ能わず破れて日本に合する事となれるなり。」（一九一〇年八月二七日付）

だが、この併合に当の朝鮮人はどういう態度だったか。一九一〇年の併合への契機となった一九〇五年の第二次日韓協約の締結にたいし、当時ソウルで発行されていた『皇城新聞』は、論説「是日也放声大哭」のなかで朝鮮の併合に激しく抗議し、こう書いている。

「噫、彼の豚、犬に若かざる所謂我が政府大臣が栄誉利益を希覬し、仮嚇に怙怯（おびえ恐れ）し、遂に穀鯨（死をおそれ）し売国の賊に甘んじ、三千里疆土（朝鮮の地）と五百年の宗社を他人に奉獻し、

二千万生霊をして他人の奴隷となせり……何の面目ありて二千万同胞に対せんや。嗚呼痛なるかな、嗚呼憤なるかな。我が二千万奴隷の同胞よ、生か死か。檀⁽¹⁾箕以来四千年の国民精神は一夜にして猝然滅亡して止むか。痛なるかな、痛なるかな、同胞よ、同胞よ。」(一九〇五年一月一八日)

『東京朝日新聞』の論説と『皇城新聞』のそれとのあいだに、なんと大きなへだたりがあることだろう。『東京朝日』の論説の筆者が『皇城新聞』の論説にもられた朝鮮民衆の悲憤を多少でも理解していたならば、そして、そこに生きる二〇〇万人の民衆の心をいささかでも知っていたならば、このような論説を臆面もなく書けるはずもなかっただろう。この論説が当時の日本人の認識の水準を代表していたからこそ、その後の一九一〇年の朝鮮併合から一九四五年の日本帝国主義の敗北までの三十六年間の植民地支配に影響を及ぼすほどの国民的批判の声はおこらなかった。この間、日本帝国主義は二〇〇〇万朝鮮民衆から土地と家と命を奪い、産物と資源をかすめとり、そして、ファシズムの荒れ狂う一九三〇年代からその滅亡までの時期には、朝鮮語の使用すら禁じ、朝鮮人の魂を奪い去った。

こうした蛮行を許したのも、当時の日本人の朝鮮にたいする認識の欠如にひとつの大きな要因があった。その認識の欠如のもとで命を奪われた多数の朝鮮人のなかにすぐれた文学者も含まれていた。そのなかには日本帝国主義の獄内で獄死させられた三人の文学者がいる。申采浩、李陸史、尹東柱である。日本では一般にはまだほとんどその名を知られていない。

1 申采浩

申采浩は、一八八〇年、忠清南道に生まれた歴史学者、文学者、ジャーナリストであり、朝鮮独立運動の闘士として日本官憲に逮捕され、一九三六年、旅順の日本刑務所で獄死した。申采浩の生まれた一八八

○年は、日本が軍艦雲揚号をくりだし、砲艦のおどしで朝鮮に江華島条約を強要し、開港させた一八七六年の四年後であり、風雲急を上げる時代であった。当然ながら植民地化の危機にたいして強い民族主権保衛の運動が各方面でおこり、申采浩は物心つくころからそうした動きに強く感化されていた。一九歳で成均館（高麗および李朝時代を通じて最高の教育機関）にはいり、一九〇五年、日本が強圧で締結させた第二次日韓協約、いわゆる乙巳条約締結の年に成均館博士として世に出ると同時に、当時、民族主権回復、排日独立思想を鼓吹していた『皇城新聞』の論説委員となった。

この乙巳条約は、朝鮮の外交権を剝奪し日本外務省がすべての外交を管掌して朝鮮を保護国とするとともに、実質的な朝鮮の支配者である日本人統監を置くことをとりきめたもので、朝鮮の植民地化への大きな転機をなした条約であった。

申采浩は『皇城新聞』、およびその後移った『大韓毎日申報』で、独立思想を高揚する論説に健筆をふるう一方、『伊太利建国三傑伝』『読史余論』『乙支文徳』『東国巨傑都統伝』ら内外の愛国的偉人の伝記の執筆・翻訳紹介につとめ、国権回復と民族独立を熱情的に訴えた。しかし、一九一〇年、日本が朝鮮を完全に植民地にするや憤然として祖国をあとし、ウラジオストック、北京、上海などの地を転々と亡命しつつ独立運動を続け、亡命先で極度の資料不足ときびしい生活環境のもとで朝鮮史の不朽の名著といわれる『朝鮮史研究草』をまとめる。

一九二三年、申采浩が書いた「朝鮮独立宣言」は、日本帝国主義にたいする烈々の糾弾の文として歴史に残る宣言であるが、ここに彼の激しい性格と強い愛国心がいかんなく示されている。

「強盗日本がわれわれの国号をなくし、われわれの政権を奪い、われわれの生存的必要条件をことごとく剝奪した。経済の生命である山林、川沢、鉄道、礦山、漁場……、あるいは小工業の原料までこと

ごとく奪いつくした。」

「最近の三・一運動以後、水原、宣川……等の国内各地から北間島、西間島、露領沿海州の各地で居留民を屠戮し、村落を焼きつくし、財産を掠奪し、婦女を凌辱し、首を切り、生埋めにし、火焙りにし、あるいは体を二つ三つに切つて殺し、児童に残酷な刑を加え、婦女の生殖器を破壊するなど、なしうる極限まで残酷な手段を用いて恐怖と戦慄でわが民族を圧迫し、"人間の死体の山"を築こうとしている。」

「われわれは日本の強盗政治、すなわち異民族統治がわが朝鮮民族の生存の敵であることを宣言すると同時にわれわれは革命手段で、わが生存の敵である強盗日本を殺伐すること、これこそすなわちわれわれの正当な手段であることを宣言する。」

申采浩はこうした激しい革命宣言を草し、民衆をたたかいの道に呼びさますかたわら、文学者として「龍と龍の大激戦」「夢の空」などの創作とともに多くの詩を書いたが、そのなかに「暁の星」と題する詩がある。

1

ついでにしがたまで 空いっぱい満ちていた友ら

その距離が遠いからとて

暁が冷たいからとて

かくもまばらなるか

早くも！

2

月すでに沈みぬ

陽はいまだ遙か

この時刻！ この時刻

われらが確実にいなければ

宇宙の光明を誰が求めよう？

いずこにありて！

3

冬至三月^{みつき}長ながしき夜 眠れぬ寡婦の^{ともしび}灯

宇宙の瞑想に しばたたく詩人の眼

万里他郷に座し 老いたる旅人の頭髮

山を越え 海を越え

ひとり往く志士の心

われらならで 同情の士誰あろう？

闇はしんしん

きらきら きらきら

4

吹きすさぶ

風の鞭

暁 大鷲が空に舞う ともしびをかかげ

たいまつをかかげよ 道案内に立て

今宵また会わん

闇はしんしん

きらきら きらきら

5

暁の光

自然の珠

ひとつ またひとつ摘みとり

われらの子らの胸に

もれなく灯し

雲わきたとうと

霧たちこめようと

風吹こうと

雪や雨降ろうと

永久に消えぬ光となり……

千万年の長い暁となりえたら！

——「暁の星」(全文)——

いつ書かれたものか不詳であるが、朝鮮が一寸先も見えぬ闇の時期のものであることはたしかだ。暁の光もささぬ闇。月は沈み、あけぼのはまだはるかな時刻。星影すらいまはまばらな長く暗い夜の溜息のみが支配する時期である。だがこの詩は、そうした闇にあっても「われらがいなければ、宇宙の光明を誰が

陽はいまだ遙か

この時刻！ この時刻

われらが確実にいなければ

宇宙の光明を誰が求めよう？

いずこにありて！

3

冬至三月^{みつき}長ながしき夜 眠れぬ寡婦の^{ともしび}灯

宇宙の瞑想に しばたたく詩人の眼

万里他郷に座し 老いたる旅人の頭髮

山を越え 海を越え

ひとり往く志士の心

われらならで 同情の士誰あろう？

闇はしんしん

きらきら きらきら

4

吹きすさぶ

風の鞭

暁 大鷲が空に舞う ともしびをかかげ

たいまつをかかげよ 道案内に立て

ら禁じたほどである。だがそうした狂気のなかにあっても、けっして犯されない朝鮮の心を凜冽の抒情でうたった詩人李陸史がいた。

遙かな昔

天がはじめてひらかれ

どこかで鶏の鳴き声がきこえたのだろうか

山なみがことごとく

海を恋い慕って駆けだすときも

この地を犯すことだけはできなかっただろう

たえまない時の流れを

忘れずに訪れる季節が花咲きしほみ

大きな川の流れがはじめて道をひらいた

いま 静かに雪が降りこめ

梅の香りが ひとりほのかに流れゆくゆえに

わたしは ここで貧しい歌の種子をまこう

ふたたび千年のちに

白馬に跨ってくる超人があれば

この曠野で声かぎり歌わせよう

——「曠野」(全文)

白馬にまたがってくる超人を確信し、民族の希望をうたった李陸史は、美しい抒情詩人であると同時に、朝鮮独立運動の闘士でもあった。李陸史は、一九〇五年、朝鮮慶尚北道安東に生まれ、北京大学で社会学を専攻した。青年時代から独立運動に参加し、国内外で活動し前後一七回投獄された。李陸史はペンネームで、本名は活、あるいは源社。ペンネームの由来は、彼がはじめて投獄されたときの監房の番号が二六^{イネー}四であったところから、それに漢字をあてて李陸史^{イネー}としたといわれる。最後は日本帝国主義の敗北間近の一九四三年、ソウルで逮捕され、北京に移送されて翌四四年一月日本の北京刑務所に投獄され、そこで獄死した。四〇歳であった。

韓国の詩人で先ごろ物故した申石岬は「李陸史の追憶」(韓国の月刊誌『現代文学』一九六二年二月号)という一文のなかで、彼の死の直前の模様をつぎのように書いている。

「一九四一年秋、私は田舎で陸史の病報に接した。私が明洞(ソウル市内)の聖母病院に彼を訪ねたときには、ほとんど回復していたが、ひどくやつれた顔をしていた。彼は肺を患ったのであった。翌年の秋に私がソウルにやってきたとき、彼の病氣は完全に回復していたが、以前のような明るさは少ないように感じられた。彼は北京に行くと言った。その頃戦争は拡大していて、とても危険だったので、友の多くはしきりにひきとめた。しかし彼は耳をかさず、春雪の降る日、とうとう北京に向けて出発したのだった。

その年の夏、私がふたたび上京すると、意外にも彼は帰国していた。私はおどろき、かつよろこび、多くの親友と共に、この上なく楽しい集いをもとうとした。ところが約束した場に陸史はあらわれず、

その日の朝、北京から来た日本領事館の刑事にひっぱりだてられたという話だった。座中は暗然として声なく、黙々と盃をとり、『長沙の詩』を吟じた。

いま韓国や戦前の朝鮮人のあいだで人口に膾炙^{かいしや}している詩「青葡萄」は、この詩人の澄んだ心と人間へのこよなくあたたかい眼を感じさせ、伝説とともに静かに息づく村と村人への愛着、故郷への愛をうたつて心に沁みる作品である。

わがふるさとの七月

青葡萄の熟れゆくころ

この村の伝説がふさふさとした房となり

夢のような遙かな空は粒にとけ入り

空の下 青い海が胸もとを開き

白い帆の舟がひとつ 静かに波に運ばれてくれば

わたしの待つ友は疲れた体に

青い衣をまとして訪ねてくるといったから

わたしは彼を迎え この葡萄をともに食べよう

両手はしとどに濡れてもよい